

「てつがく」の子どもたち



福島県公立小学校教諭

坂内 智之

ばんない ともゆき カリキュラム・マネジメントによる授業づくりや「てつがく」を取り入れた子どもたちのかかわり方を考えています。

みなさん、こんにちは。昨年度はリリース連載で僕と学校と子どもたちとのかわりについて実践を紹介させていただきました。今年度は「てつがく」をテーマに、毎月、僕の考えていることや実践などについて紹介していきたいと考えています。どうぞよろしく願います。

なぜ「てつがく」?

子どもたちの問題行動と向き合い、

日々取り組む先生方にとって、「なぜ、てつがくなの?」と、不思議に思われるかもしれません。

僕と「てつがく」との出会いは一冊の本、『子どものための哲学対話』(永井均著、内田かずひろ絵、講談社文庫)でした。一〇年ほど前に、子どもたちとかわる中で、何かよいネタになるものはないかと、何気なく手にしたこの本が、僕の教師としての方向性を変えていくことになりました。はじめはその重要性に気がついていませんでした。「子どもたちと一緒にてつが

くの話をして楽しめればいい」、その程度の考えだったと思います。子どもたちは予想通り「てつがく」の話は大好きで、「次はいつやるの?」とたびたび聞かれるようになります。子どもと対話をしながら、子どもたちのおしゃべりを楽しんできました。

広がる問題行動

ところで、近年になって、学校現場に少しずつ変化の兆しが見えてきました。学校現場では誰もが学校や学級の状況が厳しくなってきたことを実感しているはずです。それは文部科学省の調査データ「平成三〇年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」にも表れ始め、いじめ問題の増加(七年ほど前にいじめの定義が厳密化され、データは一気に増加しましたが、今になってもその増加が止まっています)、不登校の児童生徒の激増(五〜六年でその数が二倍になる勢い)、そして小学生による対教師暴力の増加も顕著です。

僕がこうした変化に気がつき始めたのは五年ほど前なのですが、それ以来ずっと、その原因を探ってきました。その原因は今でもはっきりとしたことはわからないのですが、子どもが大きく変化し始めていることはよくわかります。

「トラブルの原因は相手だと言い張って、自分の非を一切認めない」

「ちょっとしたことでもキレて暴れる」

「対人関係が弱く、すぐに心が折れてしまう」

もちろん、こうした子どもは以前にもいたわけですが、その頻度が以前には考えられないくらい増加しています。

対応が追いつかない



小学校現場では、学級の中にこうしたトラブルを起こす子どもが複数いることが当たり前になってきました。学級に一人であれば、その子どもに寄り添い、その子に合わせて対応することが可能かもしれない。しかし、複数の子どもがいる中では、一人に寄り添うことが状況を

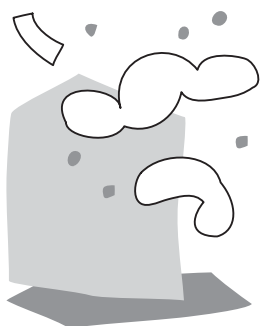
さらに悪化させてしまうことさえあります。そうした学級が複数出てくることで、学校全体が不安定になっていきます。

それは、「水の入ったビニール袋に次々と穴が開き、教師の努力では、もう水がもれるのを塞ぎきれなくなってきた」と、そんなイメージを僕は持っています。

変化の原因は「メタ認知力」の低下



はっきりとした原因はわからないものの、子どものいったい何が変化したのか、



僕がここ数年子どもを観察する中で見えてきたのは「メタ認知力」の低下です。

トラブルの原因が自分にあるとも「自分は悪くない」と言い張るのは、ごまかしているのではなく、本気でそう思っているのではないか、そう思えるのです。「自分のせいじゃない」とキレて暴れる姿からは、「おれはこんなに怒っているんだぞ!」という強い主張を感じます。泣いてふさぎ込んでいる子どもからは、「私(だけ)をもっと心配して」という気持ちを感じます。

このような子どもの行動からは、自身と対話する力が弱く、メタ認知力の弱さを感じるので。

今の学校に足りないこと



ここ数年の子どもの変化を見る限り、これからさらに学校の状況は悪化するのではないかと僕は予想します。学校はその「対応」に、ますます追われることになることでしょう。しかし、そうしたトラブルによる「対応」に追われている限

り、すべては「後追い」になってしまいます。

私たち教師は、子どもが問題を起こす本質に触れることで、問題行動そのものを抑制していくことが大事なのだと思うのです。そうした意味で、今の学校は子どもの心の成長をしつかりと育てられていないのではないかと思うのです。そして、そのための手法も持つてはいないのではないかと思うのです。

「てつがく」の意味

最初は単純に「面白いから」と「てつがく」を始めたのですが、それが次第に子ども自身にも、子どもの人間関係にも大きな成長をもたらすことがわかってきました。

自分の欠点を指摘されたたん、鉛筆で机を突き刺しながら暴れた子、友達関係ですっとトラブルが続く、保護者を巻き込んで大騒動になった子、友達とトラブルを起こし、拗ねて掃除用具のロッカーに閉じこもり出てこなかった子、そう

した子どもがいつの間にか、ごく普通に、穏やかに生活している。それはなぜか、ひよっとすると「てつがく」にその答えの一つがあるのではないかと思うようになったのです。

そしてもう一つ、これは僕が「てつがく」を取り入れて最も重要だと気がついたことなのですが、それは僕自身の変化です。「てつがく」は僕自身の子どもの見方や考え方、授業などにも変革をもたらすこととなります。

僕はアクティブラーニング型の授業を二〇年にわたって実践してきたのですが、「てつがく」と出会ったことで、授業の本質が変わってきたように思えるのです。この変化についても機会を設けてお伝えしたいと思っています。

「てつがく」ってどんなこと

連載第一回の最後に「『てつがく』ってどんなこと」という例を一つ紹介してご紹介したいと思います。

「てつがく」とは、誰もが「当たり前」

って思っていることを問うことで、無意識の中から自分の考えを掘り起こす作業です。

例えば「人はなぜ悲しくなるの？」という問いは、「私は悲しい」という、誰もが使う表現で終わらずに、「悲しい」と思う自分の心を深く見つめていききっかけになっていきます。

「なぜあのとき、自分は悲しいと感じたのだろうか」

「同じことでも、『悲しい』と思う人と『悲しくない』と感じる人がいるのはなぜだろう」

というように、深く掘り下げていくことで、自分の心を深く覗いたり、他者と自分との違いを考えたりしていきます。こうした話し合いを通して、子どものメタ認知の力を伸ばしていくのです。

*

次回では、こうした「てつがく」を子どもたちの実際の言葉を交えて、紹介していきたいと思えます。この一年間、どうぞよろしくお願いいたします。